

学生に響くアウトキャンパス・スタディ —「駿大版ダッシュユ村」の軌跡—

平井純子

I はじめに

過疎化、少子高齢化とこれに伴う諸問題を抱える地域への対応として、国は2014（平成26）年12月「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を閣議決定した。持続可能な地域づくりの創生を目指し、「稼ぐ地域をつくるとともに、安心して働けるようにする」「地方とのつながりを築き、地方への新しいひとの流れをつくる」「結婚・出産・子育ての希望をかなえる」「ひとが集う、安心して暮らすことができる魅力的な地域をつくる」という4つの基本目標を掲げ、さらに「多様な人材の活躍を推進する」「新しい時代の流れを力にする」という2つの横断的な目標に向けた政策を進めている（内閣官房、内閣府総合サイト）。急速に進む地域の衰退に一刻も早く手を打ちたいと、さまざまな視点からの政策を掲げているが、特に観光にかかる分野は近年の外国人観光客の増加もあって、地域創生への貢献が大きいと期待を寄せている。

駿河台大学が立地する埼玉県飯能市では、第5次総合振興計画の中で観光の振興について重視しているが、特にエコツーリズムの推進が特筆される。飯能市でのエコツーリズムは2004年より取り組みが始まり、2008年に全国エコツーリズム大賞を受賞、2009年エコツーリズム全体構想認定全国第一号、2016年には特別継続賞を受賞するなど、エコツーリズムの先進地として知られている。このことから、国内外より多くの視察が訪れており、飯能市の里地里山の自然環境資源を活用したエコツーリズムの取り組みを体験している。観光が地域創生に貢献するとされ、また、モノ消費からコト消費へと観光が体験型へと移行しているなかで、エコツーリズムは持続可能な観光の形として、ますます重要性を増している。

社会の現代的な動きに連動し、大学にもさまざまな影響がある。少子化は大学の定員拡大に相まって、大学や短期大学への入学志願者はほとんどが入学できる状態（文部科学省HP）となっている。このため大学入試ではその選抜機能が低下し、大学教育を受けるために必要な学力を評価・判定することができなくなってきており、入試によって入学者の学力水準を担保することが困難な状態になりつつある。また、近年ではSNSの普及により、学生のコミュニケーション能力の低下が問題視されている。就職活動に際し、企業側が最も重要視しているのは、コミュニケーション能力であるのは、ここ15年ほど変わらない。産業構造の変化とグローバル化によりさらにその傾向は強まるであろう。

大学に課せられた使命として、地域社会への貢献は、その大きな柱の一つとなっている。駿河台大学では大学憲章の中で地域との協働をうたっており、「地域に根ざした大学」を目指し、「地域社会の中核を担う人材を育成する大学」・「地域活性化の核となる大学」・「地域の知の核となる大学」を推進すべく、2013（平成25）年に地域ネットワーク推進支援室を改組し、地域連携センターが設置された。大学が展開する地域での諸活動を取りまとめる機関として機能している。

本学における地域での活動のきっかけとなった取り組みとして、2001年に発足した「駿大・地域フォーラム」（以下地域フォーラム）がある（鎗田 2009）。地域の実業家との懇談会から始まった地域フォーラムは、シンポジウムの開催や地域にまつわる報告書の作成、地域インターンシップの開始、森林

環境プロジェクトなど、スタート当時としては革新的な取り組みであり、文部科学省の現代GPを複数採択されるなど、地域との協働を積極的に進めた。現在、その活動は終了したものの、本学の地域活動の基盤がここにあり、現在へと継承されているのである。

本稿では「駿大版ダッシュ村」としての活動について、これまでの軌跡について述べていく。上記の地域フォーラムの活動に示唆を受け、地域フォーラムの手助けを受けながら開始した活動は、2019年度で6年目となった。この取り組みは、埼玉県が2010（平成22）年度から実施する、高齢化や過疎化の進行により、農林業や地域活動の維持が困難な状況となっている中山間地域に大学生を送り込む「ふるさと支援隊」事業に、2014年から参加したものである。中山間地区で学生たちと活動する目的は、エコツーリズムの概念に基づいたエコツアーを実施し、観光の可能性を考えるきっかけとすること、学生にとっては、テレビの人気番組に類似した体験＝古民家を再生し、放棄農地や山林の有効活用を実施する、という遊びとも感じられる要素をふんだんに散りばめつつ、地域での学びの場を創造すること、ひいては地域の活性化につなげていくことだ。この活動が、学生たちにどのような影響を与えてきたか、学生たちや卒業生へのアンケートをもとに考察する。

Ⅱ「駿大版ダッシュ村」の活動場所

1. 飯能市名栗地区で活動開始したわけ

埼玉県飯能市は池袋より西武池袋線の急行で約50分、「駿大版ダッシュ村」を実施する旧名栗村の湯ノ沢地区は、飯能駅から国際興業バスに乗車し約60分、終点の湯ノ沢で下車し、徒歩5分ほどで到着する。湯ノ沢まで行くバスは日に4本だ。

築120年ほど経過した古民家を借りることになったきっかけは、地域フォーラムで借りようと物件を探していたことにある。借りる交渉を進めていたとのことだが、飯能市街地から遠すぎるとのことで、地域フォーラムとしては断念した物件であった。ちょうどその頃、「ふるさと支援隊」事業を担当する埼玉県農業ビジネス支援課より駿河台大学に対し「事業に参加しないか」との声かけがあった。地域連携センター会議で、参加するゼミなどがあるか諮られたが、だれも手を挙げなかったため、筆者がゼミナールで参加したいと申し出たことに始まる。筆者は、学生が飯能市内の中山間地域にある拠点で通年に渡り活動できる場があれば、学生にとって多くの学びがあると確信していた。地域フォーラムの一員となっていた筆者はすぐに古民家の交渉にあたった担当者で連絡を取り、家主を紹介してもらった。地域フォーラムが古民家を借りる交渉をしていたため、筆者が現地確認をし、借りたいと申し出た際には、すでに家主のM氏は家族会議を開き、家を貸してもよい、としていた。地方の空き家はなかなか貸してもらえないことが多い。多くは空き家となってもその中には仏壇があり、敷地内に先祖代々の墓を有しているためである。筆者が難なく古民家を借りることができたのは、地域フォーラムが事前に交渉をしていたおかげであった。

2. 手続き

M氏との間で話がまとまり、借りる家屋と畑が決まった。そして、家の中にある家財道具は適宜処分してもよいこと、家を返還する際には、原状復帰を求めないこと、必要に応じて家の中を修繕してもよいこと、それにかかる費用は借主である大学が負担すること、家屋とその周辺の畑地や山林を活用してもよいことなどを文書にまとめ、契約書を作成した。借用した範囲は、家屋の約100㎡、畑約1000㎡である。

Ⅲ「駿大版ダッシュュ村」での活動について

1. 活動内容

古民家を一軒借りて何をやってきたのか。これまでの活動内容について、まとめたのが表1である。開始当初のプロジェクト名は、「楽山人塾—地域資源を活用するための学生と名栗住民との協働—」とし、地域との関係性構築と拠点づくりに重点を置いたもの（図1）、5年目からは「Hanno Happy Woody Project」とし、西川材の活用と楽しい空間づくりに重点を置いた企画とし、埼玉県農業ビジネス支援課が所轄する中山間「ふるさと支援隊」事業に申請、採用された。また2016年は環境省の受託事業も受けた。厳冬期を除き、一週間に一度のペースで現地に足を運び、さまざまな活動を行った。年によりばらつきがあるものの、最も多い年の2019年は、学生や地域住民、視察など含め586名の人が関わった。

表1：「駿大版ダッシュュ村」での活動内容

年度		2014	2015	2016	2017	2018	2019
補助金	埼玉県事業 PJ名	楽山人塾				Hanno Happy Woody Project	
	環境省事業						
活動日数		47	55	47	28	31	53
活動人数（のべ人数）		269	382	532	448	323	586
家屋の改修・修繕	トイレ改修						
	不用品処分						
	床板はり						
	天井はがし						
	風呂改修						
	漆喰塗						
	障子張り替え						
	畳替え						
施設整備	物置片付け						
	車庫取り壊し						
	ブランコづくり						
	畑開墾						
	ピザ窯づくり						
	遊歩道整備						
	ツリーデッキ						
	木の椅子、人形作り						
環境整備	鳥小屋取り壊し						
	畑雑草とり						
拠点活用	間伐						
	フチサバイバル						
	エコツアー						

活動初期は家屋の改修・修繕に時間を多く割いた。6年間、空き家になっていた家は埃まみれで、屋内には土足で入るような状態になっていた。また家財道具の多くは、そのままの状態になっていたため、家に残る不用品の処分が主たる活動のひとつとなった。まずは、必要なものとそうでないものをより分けていった。普段、ごみ出しを担っておらず、ルールがわからない学生が多く、クリーンセンターで分別のやり直しをさせられたり、受け入れ拒否をされたり、思ったよりも多くの処理費用がかかったりと、一つ一つがとても骨の折れる作業であった。

不用品の処分と並行して、トイレの改修を行った。

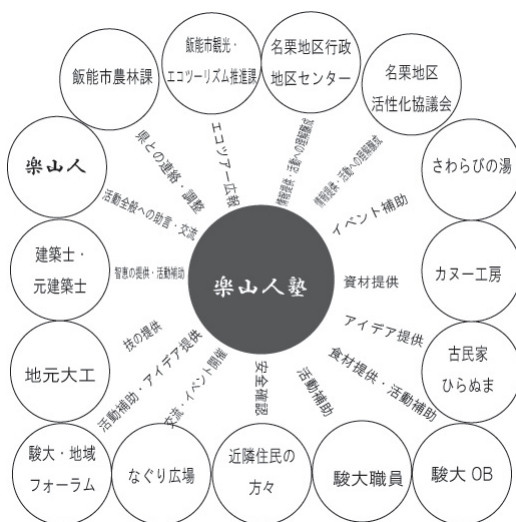


図1：活動初年度の地域との関わり

きれいなトイレは若い学生にとっては必須アイテムである。地域フォーラムのT氏に協力を得つつ、中古の洋式トイレをいれ、壁を西川材で張ったトイレにリニューアルした。窓には家財道具の処分で出た小さくて素敵な模様が施された扉があったため、これを学生が気に入り利用した。のちにトイレを見た家主が「素敵な窓になったね。仏さんの扉だったんだけどね」といわれ、当該学生は何とも言えない心情となっていた。

また初年度は地元の大工とともに、床板を張り替える作業を行った。6年空いていたことで、湿気が籠り、床板は朽ちていた箇所が複数見られた。体重をかけると踏み抜くようなところもあり、実際、筆者や学生が床を踏み抜いてしまった。場所によっては根太も朽ちており、学生たちは水平器を使い、水平を確保しつつ、西川材の床張りに挑戦していた(写真1)。



写真1：床板はりの様子 (2014年度)



写真2：西川材を活用したお風呂づくり (2015年度)

学生に響くアウトキャンパス・スタディ
 「駿大版ダッシュ村」の軌跡—

天井は新建材を張っている箇所が多く、一つ一つはがしていった。すると、真っ黒な立派な張りが出てきた。埃にまみれながらも一生懸命に天井の板をはがし、旧来の姿へと戻していった。

2 年目、ハード面では、地域フォーラムをはじめ地元の方の協力を得つつ、西川材を活用した風呂の製作をおこなった（写真2）。さらに家屋内の湿気を回避するべく、漆喰や珪藻土を使って壁を塗り直した。当然のことながら学生にとってすべてが初めての体験で、ネットからの情報をも得つつ、協力者の助言に耳を傾けながら、試行錯誤を繰り返し、作業を行っていった。

施設設備では、邪魔になっていた車庫を取り壊すとともに、山にブランコを作り、楽しい空間づくりもスタート、斜面地の畑の整備も開始したが、思いのほか手がかかり、作物を植えるまでには至らなかった。

ソフト面では改修した家屋を有効活用すべく、エコツーリズムの概念にもとづいた、エコツアーを開始した。小学 4 年生から 6 年生までを対象とし、「はじめてのプチサバイバル」と題し企画したが、思いのほか集客に苦戦し、5 名の参加者での実施となった。参加人数は少なかったものの、自分たちが改修した家屋を活用してのエコツアーを子どもたちはとても楽しんでくれたようで、満足のいく結果となった。

3 年目は県のふるさと支援隊とともに、平成 28 年度環境省受託事業「地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」を受託し、山間地域の小さな拠点づくりのための活動を進めた。パンフレットを作成し、活動をアピールするとともに、協力者を募った（図2）。電動チェーンソーや丸鋸などの機材のほか、食材を寄付してくださる方がおり、大変ありがたかった。

この年、ハード面では、カビ臭くなっていた畳を入れ替えることができた。また、これまで手を付けていなかった押し入れや物置の整理を開始、分別作業に追われた。さらに土間に痕跡があったカマドの煙突を再利用し、ピザを焼く石窯づくりを始めた。耐熱モルタルと耐熱煉瓦を使い、窯づくりを進めた。



図2：パンフレット（三つ折りにして使用）

家屋周辺の畑地にはワラビが植わっているだけであったが、地元の方の勧めもあり、レモンの苗を植えることとなった。斜面地に合うと考えられること、6 次産業化を考えると多様な可能性があると思われること、そして、苗を 50 本も寄付してくれた方がいらしたからである。

畑を耕うんし、シカやイノシシ除けの柵を設置、万全を期してレモン苗を植えていった。しかしながら、植樹の翌週、畑に行ってみると、ほとんどがシカに食われていた。食われていないものも踏みつぶされ、どれ一つ残らなかった。山間地域での畑活用の難しさを思い知らされた一件であった。

ソフト面では、エコツアー「はじめてのプチサバイバル」を 4 回実施、各回定員 10 名であったが、

合計 35 名の小学生が参加、川遊びをしたり、BBQをしたり、うどんを打ったり、西川材で工作したりと、学生たちとともに思いっきり田舎での夏休みを楽しんだ。

4 年目、家屋の修繕・改修がひと段落し、物置の片づけをしつつ、周辺環境を利用する遊歩道の整備に取り掛かった。間伐をし、木材を運びだすなど、新たな局面を迎えた。前年度、シカにすべて食われた畑作業については、再チャレンジで、地元のジャガイモを植えることとした。再び柵を設置しなおし、イノシシに食われないように細かい金網で土の表面をカバーし、獣害に合わないように対策をした。しかしながら、翌週にはイノシシにすべて食われてしまった。人間の予想をはるかに超えるパワーを持っているのだと実感させられた。

ソフト面では、継続して実施していたエコツアーに「待った」がかかった。宿泊を伴うエコツアーが法に抵触する恐れがあったため、この年はやむなく募集を停止した。結果としては、本エコツアーは問題がないことが後日明らかになったが、民泊が問題になるなどしていた時期であり、さまざまな要因が絡んでくることを実感した一件であった。

5 年目はそれまでの 4 年間の拠点づくりから楽しい空間づくりへとステップアップした。間伐した材を活用するためのプロジェクトとなり、間伐材で木の人形を作り、まちづくりへと進める企画を開始した。このため、この年に関わった学生有志はチェーンソーの資格を取得、自分たちで間伐できるようにした。これとともに、敷地内にツリーデッキを作り始めた。人形作りは、地元の方に講師をお願いし、作成してみたものの、作品としてのセンスが問われるということがあり、木の椅子づくりへと変更することとなった。

前年度できなかったエコツアー「はじめてのプチサバイバル」は再開し、全 4 回で 40 名ほどの参加者を得た。施設整備、環境整備が進んだことで活動範囲が広がり、より楽しい空間を提供できるようになった。

そして、6 年目、木の椅子づくりのための間伐を進めている。この年の学生有志にもチェーンソー資格の取得を勧め、女子を含め、全員が取得した。木の椅子を作り、地域で活用してもらうとともに、西川材の有効活用について考えるきっかけとすべく進めている。

また、遊歩道の途中で休憩する場所が欲しいと、解体業者から寄付された古材を使ってデッキづくり



写真3：エコツアー「はじめてのプチサバイバル」の様子（2019年度）

をはじめた。

エコツアー「はじめてのプチサバイバル」(写真3)は日程を夏休みの初期に設定したが、思ったように集客が進まず、全4回でのべ25名ほどの参加にとどまった。一方で、3回にわたり参加した児童が複数名出たことは、うれしいことであった。

活動している中で毎年大変な作業は、草刈りである。刈り払い機を使い、作業を行うが、範囲が広いのと、一度刈ってもすぐに伸びてきてしまうので、非常に厄介だ。山間部での苦労を身をもって学んでいる、そんな場である。

2. 地域活動

「駿大版ダッシュ村」の拠点での活動とともに、地域イベントへの参加を積極的に進めてきた(表2)。

表2：地域イベントへの協力

イベント名	活動場所	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年
清掃活動	名栗						
なぐり広場訪問	名栗						
名郷味市	名栗						
ほたる観賞の集い	名栗						
川遊びイベント	名栗						
お散歩マーケット	南高麗						
エコストーブづくり	原市場						
飯能まつり	飯能						

地域の清掃活動は活動当初の2年間について、清掃活動日と学生の活動日が重なったため参加できた。しかし、基本的に地域での清掃は休日になるため、その後、参加はできていない。

本活動に当初協力してくださった方が「なぐり広場」という地域の交流の場づくりを主導していたため、また、活動日がちょうど重なっていたため、3年ほど通わせていただいた。

名郷味市は活動拠点からほど近い名郷で実施される地域イベントで、1年に一度6月に開催されるもので、活動当初から参加している。名栗地域の事業所が協働して盛り上げていくもので、学生たちはそれぞれの事業所の補助スタッフとして入り、親交を深めている。

ほたる観賞の集いは、下名栗地区で7月初旬に実施されるもので、活動2年目の2015年よりスタッフとして参加しつつ、平井ゼミのブースをもち活動をアピールするとともに、小物の販売を行い、ゼミ活動の資金としている。

川遊びイベントは夏季に下名栗地区で7月半ばに実施されるイベントで、わくわく名栗クラブが主催している。協力要請を受け、2017年よりスタッフとして参加している。地域のもつ清流という資源を活用するイベントとなっており、多くの親子連れが参加している。

お散歩マーケットは飯能市エコツーリズムの一環として実施するイベント型エコツアーで、2015年より春と秋の2回、学生たちはスタッフ参加している(写真4)。会場となる南高麗地区の細田・黒指地区は過疎化高齢化が進み、集落の維持が厳しくなりつつある地域である。2019年秋からは平井ゼミのブースを持ち、地域資源を活用した小物の販売なども行っている。



写真4：お散歩マーケット (2019年度)



写真5：飯能まつり (2019年度)

原市場地区で実施するエコストーブづくりは、駿大版ダッシュ村で実施しているエコストーブづくりエコツアーの出張版として実施したもので、例年9月の救急の日に近い日曜日に実施している。地域の防災意識を高めるとともに、庭木の有効活用という点でも活躍できると好評を得ている。

飯能まつりは11月の第一週に市内で行われる最も大きな祭りで、この拠点づくり前から中心市街地の2丁目に依頼され、参加している(写真5)。過疎化高齢化に相まって、祭りの担い手がいなくなっている現状があるためだ。朝から夜まで山車を引いたりしつつ、地域の方々と一緒に飲んだり食べたりする体験は、学生たちにとってよい刺激となっている。

以上のほかにも、単発でのイベントに参加することもある。過疎化高齢化が進む中で、若い世代に対するニーズが高まっているが、イベントの主催者の中には学生を単に「コマ」としてしか見ず人数合わせとして使いたいと思っている場合がある。地域にとっての複合的な効果が見込まれるのかを考慮しつつ、学生にとって、有効な教育的効果があるか、見極めつつ参加、協力をしている。

IV 学生による活動報告

1. 埼玉県中山間「ふるさと支援隊」事業報告

2014年度より継続して埼玉県中山間「ふるさと支援隊」事業として実施しているため、例年、年2



写真6：中山間「ふるさと支援隊」事業報告会 (2015年度)

学生に響くアウトキャンパス・スタディ
—「駿大版ダッシュ村」の軌跡—

回の報告会に参加している。約 10 団体がそれぞれの活動について、15 分程度のプレゼンテーションを行い、その後に意見交換会を行っている。他大学の学生によるプレゼンテーションは学生たちにとって良い学びの場ともなり、自分たちの活動について客観的な意見をいただける貴重な場となっている（写真 6）。

2. 駿河台大学駿輝祭でのゼミ展示

活動について周知するため、また学生たちの活動の意義の再確認と振り返りのため、2014 年より 10 月末に行われる駿河台大学の学園祭である駿輝祭でのゼミナール展示を実施している。毎年、その年の活動の進行状況に合わせて、普段の活動の様子をポスターにして展示し、実際に古民家で行っている柿渋塗を体験してもらったり、エコツアーの様子を展示したり、エコストープをみてもらったりした。さらに、松ぼっくりやつる性の植物、西川材などを活用したクラフト体験をしていただくなど、活動の様子をわかりやすく、楽しく伝えるよう心掛けて展示を行ってきた。これらの内容が評価され、これまでに表 3 のように、理事長賞、学長賞、同窓会会長賞をいただいた（写真 7）。学生たちのモチベーションアップにつながった。

表 3：駿輝祭での受賞歴

2014年	学長賞	同窓会会長賞
2015年	学長賞	
2016年	理事長賞	
2017年	同窓会会長賞	
2018年	出展せず	
2019年	理事長賞	



写真 7：表彰式の様子（2014 年度）

3. 全国エコツーリズム学生シンポジウム

地域での取り組みを 2015 年に東京大学で行われた第 7 回全国エコツーリズム学生シンポジウムの報告会にて研究報告（写真 8）を行い、2016 年ポスター報告（写真 9）、2017 年ポスター報告、2019 年は研究報告を行った（写真 10）。地元根付いた活動で学生が取り組むエコツーリズムの先進事例として高く評価されたことは、学生にとって大きな自信に繋がった。また、北海道から沖縄までの全国から集まった大学の学生らと交流する中で、自分たちの活動の意義や問題点を再認識することができる、貴重な体験となった。



写真 8：2015 年第 7 回全国エコツーリズム学生シンポジウム（東京大学）



写真9：2016年第8回全国エコツーリズム学生シンポジウム（東京大学）



写真10：2019年第11回全国エコツーリズム学生シンポジウム（立教大学）

4. Instagramでの活動紹介

2019年度から、平井ゼミとしてInstagramのアカウントを得て、活動記録を残している(写真11)。日々の活動の振り返りと一般の方に見てもらうための文章構成を工夫しながら行っている。どんなふうの写真を取れば「映える」のか、試行錯誤しながら、しかし楽しみながら投稿している。

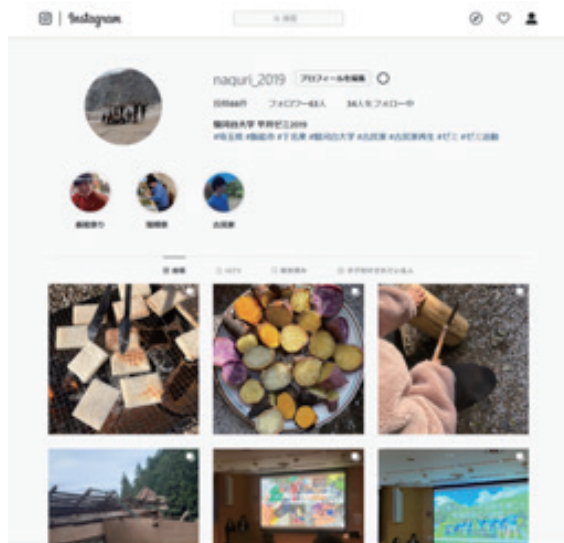


写真11：学生が運営するInstagram

V 取材や視察

本活動については、2年目から複数の視察や取材が入り、学生が主体となり対応を行ってきた。視察の主体は行政であったり、大学であったりと多様だ。露出度が高いところでは、2015年6月にはNHK北海道による取材、2017年7月には飯能日高ケーブルテレビによる番組作成、2018年3月は読売新聞が全国版で本活動を取り上げた（写真12）。



写真12：卒業式の日活動が掲載された新聞を見る学生たち

VI 学生たちの反応

1. 在学生

駿河台大学現代文化学部では3年次から自分の志望する教員のゼミナールに所属し、専門的な知識を学んでいく。筆者は地域資源活用やエコツーリズムを掲げたゼミを持っているが、「平井ゼミは忙しい」というイメージがあるようで、比較的強い思いで何かを得たいと考える学生が志望してきているようだ。

今回、名栗での活動について、現在実際に活動している学生に対し、任意のアンケートを行った。回答者は13名であった。

まず、なぜ平井ゼミを志望したか、という問いについて、「地域創生やまちづくりなどの、地域と関わることが学びたかったから」、「イベントなどで学校外の大人と関われる、他のゼミにない特徴だったから」、「エコツーリズムについて実践的に学びたかったから」、といったポジティブな意見が大勢を占めた。普段の学生生活だけでは体験できないことを求めているようだ。中には、高校3年生の時に、大学案内の中の記載を見て、興味を持った、という学生もいた。一方で、「座学が少ないと思ったから」というネガティブな学生もいた。

これまでの活動で一番印象に残っているのは何か、という問いについては、「エコツアーのプチサバイバルを企画・運営したこと」が最も多く6名で、飯能まつりへの参加が3名、お散歩マーケットが2名となった。プチサバイバルは、自分たちが活動する場で、子どもたちを預かって教育的に指導しながら夏の楽しいひと時をつくる、という責任感もあり、達成感のあるツアーである。宿泊をも伴うため、印象深いものとなったようだ。お散歩マーケットを挙げたのは2名とも4年次生だった。年に2回ではあるものの、参加するたびに地域の状況、すなわち少子高齢化が明確となり、自分たちの貢献の度合いが測れるようになるからだと思定できる。また、飯能まつりと答えた学生は「本格的な祭りに参加するのは初めてだったし、楽しかった」とコメントしていた。

ゼミ活動を通じて成長したと思う駿大社会人基礎力（1.読解力、2.文章力、3.情報収集力 4.論理的・多面的思考力、5.情報処理能力、6.理解力、7.創造的発想力 8.主体性、9.行動力・実行力 10.常識力（一般常識・マナー）、11.プレゼンテーション能力・表現力、12.コミュニケーション能力、13.協調性、14.

課題発見能力、15. 計画力、16. 問題解決能力) をすべて挙げてください、という問いについては、図2のような結果となった。13人中12名が「行動力・実行力」の成長を感じていた。また、過半数の学生が挙げたのは、創造的発想力、主体性、コミュニケーション能力、協調性であった。

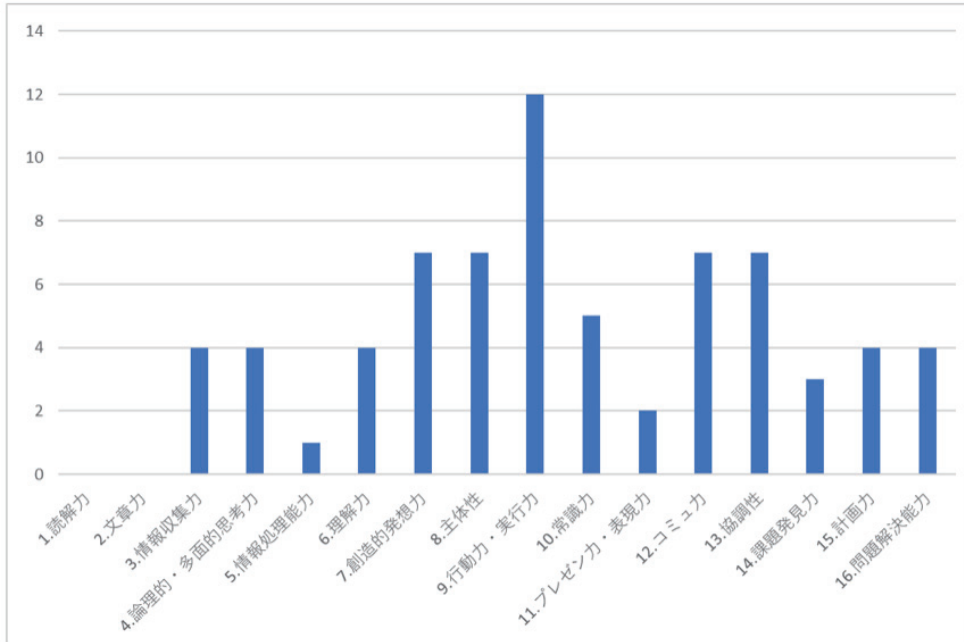


図2：在学生在がゼミ活動を通じて成長したと感じている駿大社会人基礎力

これからやりたいこと、については、古民家の敷地内にジップラインや山の中のデッキ、露天風呂、ボルダリング施設などを作りたいといった、施設の充実についての記載や、子どもを対象としたエコツアーの開催、地域へのボランティア活動など、具体的な記述が多数みられた。古民家とこれを取り巻く周辺環境を理解し始め、実現の可否はともかく、どうやったらいいか、考える力がついているようだ。

自由記載欄には、「知識だけでなく実際の体験が溢れる講義で、社会人になったときやその後にも役立つようなとてもいい経験になりました」「もっと多くの人に自然の中で遊ぶ楽しさや、古民家の魅力と価値を知ってほしい」「とても楽しく、アクティブな1年を平井ゼミで過ごすことができました」「普通はできない様な経験を積むことができるので、楽しみながら活動しています」「名栗での活動は初めてのことだらけで新鮮な気持ちで活動できてよかったです」と楽しみながら学んでいる様子がうかがえた。

2. 卒業生

平井ゼミに所属していた卒業生4名に対し、アンケートを行った。ゼミの志望理由、印象に残っていること、成長したと思う駿大社会人基礎力、現在の仕事に生かされていると感じる点について、答えてもらった。

(1) Aさん 女子 2016年卒業：事務職

平井ゼミを志望した理由は、課外活動があり、いろいろな人と関わりながら学ぶことができるので、他のゼミにはない経験ができると思ったからです。

学生に響くアウトキャンパス・スタディ
—「駿大版ダッシュユ村」の軌跡—

活動の中で一番印象に残っているのは、古民家でのエコツアー。参加するだけでなく主催者側でこういった活動をするのはなかなかないので、自分たちで準備したり進行したりするのが楽しくて、とてもよい経験になりました。

ゼミ活動を通じて成長したなあ、と感じたのは、行動力・実行力です。友達に合わせて行動することが結構ありましたが、自分で考え行動することが増えたと感じます。

ゼミでの活動が現在の職に生かされていると感じるのは、学外の一般の方と関わるが多かったことで、同年代の人以外との接し方を学ぶことができた点です。

(2) Bさん 女子 2018年卒業：公務員

平井ゼミを志望した理由は、教室にこもった授業ではなく、古民家再生など外での活動が多く、他のゼミでは体験できない部分に面白さと魅力を感じたからです。

活動の中で一番印象に残っているのは、ピザ窯作りが一番印象的でした。完成した時の達成感と、そのピザ窯で実際に手作りピザやお芋を焼いて食べたときのあの美味しさは忘れられません。みんなでそろってご飯を食べる時間も、一人暮らしの私にとっては印象的な時間でした。

ゼミ活動を通じて成長したと感じた点は、行動力・実行力、創造的発想力、主体性、コミュニケーション能力、協調性です。以前は何か作業をするにも、指示待ちになりがちでしたが、活動中は自分が行動しなければ始まらないため、自ら考えて行動することが増え、他の場面でも積極的に行動できるようになりました。また、ゼミ生同士で協力し合う機会が多かったため、協調性やコミュニケーション能力といった面も成長できたと思います。

ゼミでの活動が現在の職に生かされていると感じるのは、名栗地区について地理的な面はもちろん、観光の面でもある程度の知識があったため、観光課職員としては大変役立っています。また、活動を通じて名栗の良さを知っていることは、観光課として名栗をPRしていく上でとても生かされています。さらに、エコツーリズムの考え方について学んできたことも、エコツーリズムを推進していく上で実体験として話ができるので、とても生かされています。

(3) Cさん 男子 2019年卒業：旅行会社営業

平井ゼミを志望した理由は、大学の教室で観光の勉強をするより実践的な地域貢献の分野に挑戦することで、自分の見聞を広め興味のあるものとして選択しました。

活動の中で一番印象に残っているのは、エコストープづくり。普段の活動を通じて日々使っているものがどのように作られるのかを専門的な知識を持つ方から教わり、次には自分たちがその作り方を多くの人に発信することができ、その重要性を知れたからです。

ゼミ活動を通じて成長したなあ、と感じたのは、コミュニケーション能力をはじめ、情報処理能力、理解力、創造的発想力、行動力・実行力、プレゼンテーション力・表現力、問題解決能力です。

ゼミでの活動が現在の職に生かされていると感じるのは、おおざっぱにならないこと、細かなところまで注意を配り、大きな問題に発展しないように注意を配ること。地域貢献活動を大学時代にしていたことで目上の人との会話のネタになる。また、初めての場所や人に物おじせず接することができるようになった点です。

昔の写真や動画を見るたび、名栗に帰りたくなる。名栗はそんな場所になりました。

(4) Dさん 男子 2019年卒業：公務員

平井ゼミを志望した理由は、他の大学やゼミでは体験することのできない自然との触れ合いや様々な人との出会い、この先の人生で必ず役立つ技術や能力を学べると思ったからです。

活動の中で一番印象に残っているのは、飯能祭りです。11月で気温も低くとても寒かったですが、ゼミや自治会のみなさんと一緒に神輿を運び、自分たちが祭りの中心になっているという感じが楽しく、忘れられない思い出になりました。

ゼミ活動を通じて成長したなあ、と感じたのは、主体性、行動力・実行力、協調性です。リーダーとしての責任感や様々な人と出会い、会話をするが多かったのでコミュニケーション能力も向上し、土日のイベントもたくさんあり、意欲、忍耐力も相当鍛えられたと思います。

ゼミでの活動が現在の職に生かされていると感じるのは、大学時代、名栗で活動していたことを話すと、会話が弾み、上司や同期との交友が広がりました。また、活動自体が今の職種と直接係ることはありませんが、役所の仕事は様々なので、これからゼミでの活動が必ず役に立つと思います。

Ⅶ 学生に響くアウトキャンパス・スタディ

本学では、地域フォーラムが中心となり2004年度文部科学省の「現代GP」に採択された「学生参加による〈入間〉活性化プロジェクト」の活動が、アウトキャンパス・スタディとなり現在に至っている。当初は学生も教職員も盛り上げ、盛り上がっていたものの、世代が代わり、当初あった熱量が減退した感が否めない。地域連携は人や状況により変化するものであり、それにより地域の対応も変化する。諸状況の変化から、学生募集を行っても応募者が減り、プログラムの存続が厳しくなっているものもある。一方で、アウトキャンパス・スタディに参加し、活動をした学生の多くは大人として、社会人として、大きく成長していくのは経験上実感している。

本活動はゼミ活動として実施しているため、上記の枠内ではないが、現場に飛び込んで、地域社会で活躍する方々から直接学び、実際に働き、行動することによって、実践的に社会人基礎力を養うという趣旨とは軌を一にする。現場に出て活動することは大きな学びであり、成長を促すのだ。さらに本活動では「楽しい」と思わせる要素を盛り込んだ。その中で効果的なことの一つに「食」がある。活動時はみんなで作る食事を摂る。ガスのない野外での調理であり、米を炊く、うどんを粉から作る、焼き芋を作るなどの体験は失敗しても、場合によっては失敗したほうが、有意義な経験となっている。特に一人暮らしの学生にとっては、バランスの取れた食事を大勢でワイワイと食べられる貴重な時間となっている。

さて、Ⅵでみた学生や卒業生のアンケート結果から、彼らの多くは体験的な学びの場を欲し、または期待をして活動に参加し、学生同士、または地域の方と協力せねばならぬ状況の中で社会人基礎力を大いに高めていた。特に「行動力・実行力」については、大多数がその成長を認識していた。また、古民家での活動時をはじめ、イベントやエコツアー、食事時は対面し協力し話をせざるを得ないため、コミュニケーション能力は必然的に向上する。さらに、薪割りや米炊きなどの小さな成功体験をはじめ、木の伐採や家の改修、モノづくり等を通じ、それぞれの段階の達成感を得られる。そのひとつひとつが学生たちの自己効力感へとつながっていると考えられる。

Ⅷ 結び

本稿は、飯能市名栗地区で6年間続けている「駿大版ダッシュ村」の活動について、その軌跡を述べ、これらの活動を通じ学生たちにどのような影響があったのか、アンケート調査を行い、結果をまとめた。

活動を通じ、学生と地域との協働があり、またエコツアーを実施することで、観光を振興し、地域内

だけでなく地域外にも当該地域をアピールしていくことができた。地域の大学として、その認知度アップに少なからず貢献しているだろう。

アンケート結果では、在學生、卒業生を問わず、行動力・実行力の成長が挙げられていた。また、創造的発想力、主体性、コミュニケーション能力、協調性といった項目も上がっており、活動を行うことで、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力が身につけていることを実感していることが明らかとなった。また、さまざまな活動をやらされているのではなく、日常的な生活では経験しない事象に自ら挑戦し、それを楽しんでいる様子うかがえる。学年が上がり、活動期間が長くなっていくと、自分が楽しむだけでなく、活動する場所に愛着が生まれる様子もうかがえる。卒業後、名栗を訪ねてくる卒業生も複数いる。全員とは言わないまでも、多くの学生に響いた活動であった、といっても過言ではなかろう。この活動が名栗を懐かしい場所に、ひいては第二の故郷となり、将来移住することを期待したい。

しかしながら、名栗地区の現状は厳しい。活動を始めてからも、少子高齢化の歯止めはかからない。2019年10月に襲った台風など天災はそれに拍車を掛ける。変化する地域の状況を常に注視しつつ、活動を継続していきたいと思う。

本稿で述べた内容はあくまで活動の概要であり、簡易的な記述しかできなかった。詳細は各年、埼玉県に提出している報告書を参考にされたい。また、本稿では地域からみた本活動の成果や課題についても触れることができなかった。さらに、アンケートも簡易的なものであったため、より詳細な分析が必要である。これらを今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、これまで本活動に関わってくださったすべての皆様に感謝します。ありがとうございました。また、引き続きのご協力、応援、叱咤激励をどうぞよろしくお願いいたします。アンケートにあたり、在學生の皆さん、卒業生4名にご協力いただきました。ありがとうございました。なお、本稿では本人の承諾を得たうえで、学生及び卒業生へのアンケート調査を実施したことを申し添えます。

参考文献

- 眞鍋和博・石谷百合加（2019）「まちがキャンパス—アクティブ・ラーニングが学生と地域を強くする—」梓書院，165p.
- 鎗田英三（2009）「地域交流事業＝駿大・地域フォーラムの活動の今まで」，経済研究所所報第13号，p 3-7
- 駿河台大学現代文化学部平井ゼミ（2015）平成26年度中山間「ふるさと支援隊」活動報告書「楽山人塾—資源を活用するための学生と名栗住民との協働—」15p.
- 駿河台大学現代文化学部平井ゼミ（2016）平成27年度中山間「ふるさと支援隊」活動報告書「楽山人塾—資源を活用するための学生と名栗住民との協働—」15p.
- 駿河台大学現代文化学部平井ゼミ（2017）平成28年度中山間「ふるさと支援隊」活動報告書「楽山人塾—資源を活用するための学生と名栗住民との協働—」15p.
- 駿河台大学現代文化学部平井ゼミ（2018）平成29年度中山間「ふるさと支援隊」活動報告書「楽山人塾—資源を活用するための学生と名栗住民との協働—」15p.
- 駿河台大学現代文化学部平井ゼミ（2019）平成30年度中山間「ふるさと支援隊」活動報告書「Hanno Happy Woody Project—木材を有効活用して観光まちづくり—」15p.

内閣官房、内閣府総合サイト <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/sousei/index.html> (2019年12月28日閲覧)

文部科学省ホームページ <https://www.mext.go.jp/> (2019年12月28日閲覧)

i 日本テレビ系列で放送される『ザ!鉄腕!DASH!!』の1コーナーの「DASH村」にちなんだ名称。古民家再生や農作物の栽培などをTOKIOのメンバーが実施するもので、学生がイメージしやすいように「駿大版ダッシュ村」と呼んでいる。